

## 第二部

ペリー襲来から  
真珠湾への道

ヘンリー・S・ストークス  
(訳/藤田裕行)

第1章 一〇〇年にわたるアメリカの野望

## アメリカが隠蔽してきた史実

私はネーサン・クラークという従兄がいる。一九四一（昭和十六）年五月に、九十六歳で他界した。

従兄はアメリカと、イギリスの国籍を持っていた。一九四一（昭和十六）年初頭から、インドに展開していたイギリス軍部隊に所属していた。階級は大尉だった。

従兄はその年なれば、ビルマ（現ミャンマー）のラングーン飛行場に降りて、わが目を疑つた。

多数のアメリカ軍戦闘機と爆撃機が、翼を連ねているのを、目の当たりにしたのだつた。

胸にはつきりと、アメリカの星のマークが塗られていた。それまで、ビルマにこれほど多くのアメリカの軍用機が、翼を休めていたことはなかつた。

日本が真珠湾攻撃をする、六ヵ月前のことだつた。従兄はこの光景を見て、アメリカが日本に対し、戦争を仕掛ける準備をしていることを、直感した。衝撃を受けた。

職業軍人だつたから、その意味を即座に理解できた。目にしたものは、戦争が始まろうとしていた以外の何も、意味しなかつた。

従兄はアメリカのルーズベルト大統領が、アメリカ国民を欺いていたことに、義憤に駆られた。

従兄がこの話をしてくれた時に、私は二十代なればだつた。私は息を呑んだ。ビルマは、イギリスの植民地だつた。

当時、私にはなぜ従兄が義憤に駆られたのか、わからなかつた。

私は日本に在住して、四〇年になつた。いま、私はネーサンが語つてくれたことを、理解できるようになつた。

従兄はアメリカが隠蔽してきた史実を、話してくれたのだつた。私に七一年前の十二月八日（日本時間）に、太平洋を舞台にして始まつた戦争が、その前から準備されて、今日の世界へ導いたという問いかけを、投げかけたのだつた。

私は戦争が始まつた時は、まだ幼かつた。パールハーバーの時に、三歳だつた。

私の学生時代には、地球儀の大部分が誇らしげに、ピンク色に塗られていた。私の世代はそのような地図によつて、教育された。

地図のピンク色の部分は、大英帝国だつた。アフリカのほぼ全土が、ピンク色だつた。日本を除くアジアの大部分が、そつだつた。

第二次大戦の結果、何が起ったのか？ 地球上のほとんどのピンク色が、一九五〇年代初頭までに消滅してしまった。まったく新しい世界が、誕生した。

インドは一九四七（昭和二十二）年に、独立を果たした。大部分がピンク色だった地球が、急速に、さまざまな色に変わつていった。

私は先の大戦によつて、大きな犠牲を払つた日本国民は、生き残となつた同胞を慰めることができると思う。

人類がいまわしい植民地を捨て去つて、人種平等の新しい世界を呼び寄せることができたのは、ひとえに、日本国民が血を流したためだつた。

そもそも、アメリカはどうして対日戦争を始めたのだろうか。

アメリカはどのようにして、日本を<sup>むさぼ</sup>食り散らかしたのか？

この質問に答えるためには、ペリー提督の黒船来航にまで、遡<sup>さかのば</sup>らなければならぬ。

### 三島由紀夫と「黒船」

私は三島由紀夫と、もつとも親しかつた外国人ジャーナリストとして、知られている。

日本で盛名を馳せていた三島由紀夫と、どうして付き合うことになつたか。私が当時、

『ザ・タイムズ』東京支局長で、三島を記事にして、それが三島の目にとまつたのが、きっかけだつた。東京特派員のなかで、三島を追つていた者がいなかつたことが、功を奏したのだろう。

朝日新聞をはじめとする日本のメディアは、ひどい偏食症を病んでいて、「右翼」で「軍隊」まがいの「権の会」を組織した、三島の行動を無視することに決め込んで、いつさい取り上げなかつた。しかし、三島の死後に、朝日新聞も、NHKも、三島の「権の会」を大きく取り上げたから、十分にニュースバリューがあつたのだろう。

私の愛妻は、三島の私に対する友情に、懷疑的だつた。

「あなたたちは友人じやないわ。三島さんはあなたを利用しているだけよ」と、断じた。

それでも、私は三島と一、二カ月に一回くらいの頻度で、会つた。

一九六九（昭和四十四）年、三島が市ヶ谷で自決した一年前の夏の夜に、私は下田で晩餐に招かれた。三島はよく下田で家族とともに、夏のひとときを過ごしていた。私は三島と、家族的な交流もあつた。

その夜、三島は海を見下ろす小さな、ややみすぼらしい地元の食堂を、予約していた。メニューは新鮮なロブスター海老だつた。二人でよく冷えたビールと日本酒で、海の幸を堪能し

た。

食事を終えて、タクシーで帰ろうとすると、三島が追いかけてきた。「ホテルまで送ろうか?」と、言つた。私は「お願ひします」と、応じた。

三島が「どこに泊まつてあるんだい? 運転手に、何と言つたらいいかな?」と、たずねた。私は「黒船」と、ハッキリと発音して、答えた。

すると、三島は声を低めて「そんなどころに、泊まつてあるのか!」と、吐き捨てるようになつた。「どうして、そんなどころに泊まるんだ!」と、もう一度繰り返した。三島はあきらかに、苛立つていた。

私は不快に思つてゐるんだと氣付いて、「ただ、あなたをからかいたかつただけだ」と応じて、笑つた。

私はこの二年あまり、ペリーについて調査をしてきた。英語でペリーに関する共著を加瀬英明氏と、ニューヨークの著名な出版社から出版することになつてゐる。

そのこともあつて、あの夜の三島とのやりとりを、はつきりと思い出した。

ければばしい色のタクシー、夜の灯、食堂の外に吊された提灯、規則正しい波の音、「黒船旅館」の陰気な外装（現在は「黒船ホテル」となり、全室より海を眺めるリゾート旅

館）、三島と黒船来航について話したかつたという思い、日本の分かれ道で、交通整理員のよう振り舞つていた三島の姿。

いつたい、三島が忌み嫌い、蔑んでいた黒船とは、何だつたのか。

三島はアメリカに敵愾心を、少しもいだいていなかつた。まつたく、ほど遠いものだつた。

三島の主要な作品の訳本が、アメリカで刊行されてゐたし、新婚旅行へ向かつたのが、アメリカだつた。三島が反発したのは、アメリカではなく、黒船であり、アメリカのすべてではなかつた。

私は当時、三島の思いがわからなかつた。そこまで日本について、知識を持ち合わせていなかつた。

### ペリーという『海賊』が犯した罪業

三島が忌み嫌つた黒船は、いつたい何だつたのか?

一言でいうと、あの徒党はアメリカ海軍の制服に身を包んでいたものの、海賊集団だつた。

その一党を率いたのが、ニューヨーク出身で、頑丈な体をした、マシュー・ペリー提督だつた。

星条旗をはためかしていたが、現実は黒い海賊旗ザ・スカル・アンド・ボーンズを掲げていた。

ペリーは大胆不敵だつた。搭載した武器は強力だつた。最先端をいく炸裂弾砲を並べ、いつでも使用する用意があるといって、平和な日本を威嚇いかくした。

ペリーは四〇年にわたる航海体験によつて老けて見えたが、日本来航時は五十九歳で、いかめしい顔をしていた。全艦隊が、この「ブルイン」ブルインというあだ名がつけられた男の、指揮下にあつた。

木造船だつたこの船が、日本人から「黒船」と呼ばれたのは、船体が黒かつたからだ。船体が腐らないように、タールが塗られていた。

日本の沿海には、それ以前から、数百隻にのぼるアメリカの捕鯨船が跳梁ちようりょうしていた。

今日だつたら、密漁だ。タールを塗つていたから、日本人に黒船として知られていた。

一八五二（嘉永五）年の秋に、「ブルイン」に任務が飛び込んできた。

それは、日本と呼ばれるまつたくの処女地を、侵すことだつた。

それまで、江戸湾を侵した外国船は、一隻もなかつた。

ペリーはアジア最後の処女地を踏み荒らそとしたことによつて、西洋で比肩する者のない挑戦者となつた。

一八五三（嘉永六）年七月の蒸し暑い午後のことだつた。「ブルイン」は四隻の艦隊を率いて、浦賀水道まで到達した。

後になつてわかつたことだが、この瞬間がアジアにおいて、決定的な時のひとつとなつたと、断じることができる。

台風のために二回にわたつて失敗した蒙古襲来をわきに置けば、日本はそれまで侵略を蒙つたことがなかつた。

「ブルイン」が投錨すると、日本当局が国法に従つて、長崎に廻航してほしいと嘆願したが、彼はそれを無視して、新銃砲を誇示して、強引かつ違法に居座つた。

ペリーは、当時の世界最大の都市で、建物がすべて木製だつた江戸に、未曾有の魯威みぞうを与えた。

一発の炸裂弾が命中すれば、江戸は大火に見舞われて、壊滅する。黒船が江戸湾に停泊していた一刻一刻が、江戸に君臨していた「征夷」大将軍の権威を損ねた。

それに、江戸時代の日本には、牛車がすれ違えるような、幅広い幹線道路がなかつた。

市民の食糧をすべて海路に、依存していた。もし、アメリカ艦隊が居座つたら、江戸市民が餓えることになつた。

「ブルイン」はまるで、そこが自分の領地であるかのように、傍若無人に侵入したが、神の使命を果たしていると考えていた。その一方で、日本の神を蛮神として、そこにまつたく敬意を払うことがなかつた。

ペリーはこのように、人口二〇〇〇万人を数える、優れた文化を持つていた国を、凌辱した。

ペリーは日本に不幸な火種を植えつけ、西洋に対する長年にわたつて燃り続けた敵愾心を、いだかせた。この火種が一世紀近く後に、劫火となつて燃えあがつた。日本による真珠湾と、イギリス領だつた香港への攻撃である。

日本が誇り高い伝統を深く傷つけられ、真珠湾に始まつた反撃を西洋に加えたことについて、日本を責めることはできない。

アメリカがたつた四隻だつたが、圧倒的な力を用いて日本を辱めなかつたとすれば、山本五十六大将が率いる連合艦隊が、真珠湾に決死の攻撃を加えることはなかつた。

ペリーが国際法に照らして、日本に対して海賊行為を働いたのにもかかわらず、アメリ

カは今日に至るまで、謝罪していない。

西洋ではペリーという海賊の業績を、称賛してやまない。この差異は、驚きに値する。日本は鎖国を行なつてきたために、欧米の科学に疎かつた。だが、ペリーが日本に土産として新しい技術を伝えたことによつて、中国に一〇〇年先行して、殖産興業に勤しんで、アジアで最初の西洋に匹敵する工業国家となつたことは、事実である。

ペリーは日本に対して粗暴に振る舞つたが、炯眼の士だつた。日本が産業と技術において、アジアにさきがけて発展する力を秘めていることを、見抜いていた。

もし、ペリーが来航した時に、日本を対等に扱い、アメリカがその後、日本に対して正しく振る舞つたとすれば、日本は現在のようなアメリカの保護領ではなく、アジアで完全に独立した大国となれたはずだつた。

西洋の観点からは、ペリーは今日まで、称えられている。ペリーと黒船に乗つたアメリカの将校たちは、日本人と親しくなり、与えられた使命を見事に果たしたことになつている。

現地人（日本人）のために士官室でワインと御馳走を並べ、羽目を外したパーティを開き、客人たちが上機嫌となるかたわら、ホストが訪問者に贈物を山と渡した。ペリーは外

交官を完全に演じることによって、日米関係を深めたことになっている。

だが、ペリーはそのような賞讃に値する人物では、かつてなかつた。

では、ペリーは極東への遠征によつて、何を果たそうとしていたのだろうか？

### 何がペリーを大航海に駆り立てたのか

ペリーは黒船を率いて、一八五三（嘉永六）年から翌年にかけて、中国、現在では沖縄と呼ばれる琉球諸島、小笠原諸島を回つて、日本に到達した。

いつたい、何が、ペリーをこの大航海へ駆り立てたのだろうか？ 星条旗を掲げ、当時の世界の最強の外輪船の艦隊を率いて、世界を一周して、極東に達することは、壮大なプロジェクトだつた。

ペリーの上にいたワシントンの海軍省や、ホワイトハウスにとつて、何がそれほどまでに重要だつたのか？

これほど大がかりなプロジェクトを正当化する、相応な目的があつてしかるべきである。もちろん、そこには目的があつた。

ペリーが座乗した旗艦が、江戸湾に投錨すると、軍鼓が打ち鳴らされ、トランペッタの

ファンファーレが鳴り響き、二二発の祝砲が放たれた。目的は、一通の書簡を届けることだつた。

ミラード・フィルモア・アメリカ合衆国大統領の親書である。フィルモアは弁護士出身で、一八四八（嘉永元）年の大統領選挙で副大統領として当選し、一九五〇年、テーラー大統領の死去にともない、大統領に就任した。親書は都である京都に隠棲していた、日本の天皇に宛てたものだつた。

親書はごく親しい表現を用いて、両国の親善を演出しようとしていた。この書簡は、「ディア・グッド・フレンド（親愛なる良き友へ）」という、偽善に満ちた呼びかけで、始まつていた。

この親書は、美しい樟脳の箱に収められて、旗艦『ミシシッピ』の艦長室に置かれた金庫のなかに、保管された。

この戦艦はアメリカ海軍の保有艦のなかで、もつとも威力ある船の一隻だつたが、一八五二（嘉永五）年十一月二十六日に、ヴァージニア州ノーサウスカーラ極東へ向けて出港した。親書は、ペリーから天皇へ直接手渡すように、託された。

こうして、『世纪の郵便配達人』となつたマシュー・ペリーが誕生した。

ペリーは十五歳でアメリカ海軍に少尉候補生として入隊し、長い年月を軍務に服したが、この任務は最高の榮誉だった。ペリー自身、この任務に満足した。

ペリーはこの任務が政治的にきわめて重要なものであることを、認識していた。

書簡には美しい絹のリボンが厳かに結ばれ、太平洋を隔てた二つの国を直接接觸させ

て、意思の疎通を成し遂げることを意図していた、とされた。

しかし、一通の郵便を届けるために四隻もの軍艦が必要だろうか。これまで、さまざまな説明がなされてきた。

そのひとつとして、捕鯨産業がある。鯨油は夜の暗がりを照らすランプ油として、アメリカで需要が増大し、西洋で引っぱりだこだつた。太平洋の北西に、鯨が群棲していた。捕鯨産業は最盛期にあつた。

一八五一（嘉永四）年にハーマン・メルヴィルによる、血が涌くような捕鯨小説が、出版された。主人公は、白鯨のモビー・ディックである。そのなかに、ペリーが登場する。「（ペリーが携えたフィルモア大統領からの親書は）難破して、日本沿岸に打ち上げられたアメリカの船員に、まともな扱いをしてくれるように要求するものだつた」

全長が一〇〇メートルもある黒船は、けつして安価ではない。一〇〇〇人もの乗組員を

乗せて世界一周させるコストも、安いものではない。

当時は、パナマ運河がなかった。軍艦を日本まで到達させるには、一〇〇日間が必要だった。この労力と支出が、一握りの捕鯨船員のためだという説明を、誰が信じようか。

### 「神の意志」によつて正当化された侵略行為

目的として考えられる二つ目は、東洋への侵略を裏書きする根元的なものだ。つまり、神によつて祝福された使命を、果たそうとしたというものだ。

これは、当たつている。蛮地を教化することは、経済的な欲望を満たすことと一致していた。交易は、十九世紀の神だった。

アメリカ合衆国を築いた清教徒たちは、「神から与えられた明白な使命」によつて、西へ西へと領土を拡大することを、神の御旨を実現することだと信じた。交易は神の意志だった。

アメリカはこのような動機に駆られて、通商の世界に躍り出た。<sup>むか</sup>アメリカ合衆国は領土を休むことなく拡げ、太平洋に面したサンディエゴ、サンフランシスコ、シアトル、ボルチモアなどの新しい港を、つぎつぎと獲得していく。

侵略に次ぐ侵略によつたこのような膨張が、短時間のうちに成し遂げられた。太平洋の主要な海洋国家として、アメリカ合衆国は搖籃期にあつた。飽くなき欲望に駆られて、交易を求めた結果だつた。

世界帝国を建設しつつ、アジアへの道を開いたのは、イギリスだつた。

イギリスの商社は、ロイヤル・ネイビによつて掩護えんごされながら、交易を信仰として、他に先駆けて勢力圏を拡大していった。

このことは、建国が一段落したアメリカによつて、羨むべき手本として、受け入れられた。

アメリカは、もともとイギリスから大西洋を渡つた清教徒によつて、自分勝手に「約束された地」と呼んだ北アメリカ大陸を侵略して、築かれた国である。したがつて領域を拡げるのに当たつて、天賦の権利を有していると、信じた。

この考えは、國務長官を二回務め、アメリカ政界でも傑出した雄弁家として知られたダニエル・ウェブスターによつて、説かれた。ペリーによる黒船の冒險の支援者だつた。

しかし、アメリカ議会の大多数の議員は、ウェブスターほど熱心ではなかつた。フィルモア大統領の黒船プロジェクトに対する議員の反対は、厳しかつた。

このころ、アメリカは内向きで、外向になつていなかつた。遠くアメリカ海軍の軍艦を派遣しようという考えは、強い支持を得られなかつた。どうして、軍艦を送らねばならないのか。国内だけで、多くの問題をかかえていた。

新たに領土として獲得した州を消化するだけでも、たいへんだつた。一八四八（嘉永元）年にカリフォルニアで発見された砂金によつて、ゴールド・ラッシュが起つた。

イギリスは中国大陸のほとんどを、手に入れつつあつた。大英帝国の版図に、永遠に陽が沈むことがあつてはならないと、考えられた。

当時のアメリカにとつて、イギリスは後追いする模範ではなかつた。ワシントンで、ペリーと黒船の使命に、高い優先順位が、与えられていたわけではなかつた。

### 日本に埋蔵されていた「黒いダイヤモンド」

来航の目的、第三の説は、黒船は石炭を求めていた、というものだ。

この考えは、ウェブスターの頭から溢れだした。ウェブスターは今日でもアメリカ人が外交と政治について、竜智の扱り方とする人物である。もつとも、ウェブスターは一八五二（嘉永五）年十月に死去し、黒船が日本を目指して出発するのに立ち合えなかつた。

本格的な蒸気船が建造されるようになるのは、一八二〇年代初頭に遡る。蒸気機関を動力とする戦闘艦は、一八六二（文久二）年に始まつたアメリカ南北戦争まで、海戦に登場しなかつた。ペリーも含むひと握りの先駆者が四〇年にわたつて奮闘し、蒸気船に対し懷疑的だつたアメリカ国民を説得して、蒸気船時代の幕があがつた。

その結果、帆船は、戦闘艦として過去のものとなつた。まさに端境期だった。いずれ蒸気船時代になることは、わかつていた。だが、いつ移行させるか、大英帝国海軍も、フランス海軍も、選択を迷つていた。

議論を決定したのは、革新的な砲弾の出現だつた。

フランスの会社が、シェルと呼ばれる炸裂弾を世に出した。それまでの砲弾と違い、人や物に命中した衝撃で破裂した。シェル・ガンが、海戦を一変させた。

一八四六（弘化三）年に、アメリカが無辜の共和国だつたメキシコに、奇襲攻撃をかけた。この時に使われたのが、シェルだつた。

ペリーは年季の入つた、海の男となつていた。メキシコ沿岸を次々と攻撃して、荒らしまわつた。

一八四六年から翌年にかけて、圧倒的な武力を用いて、弱いメキシコに勝つたことによつて、アメリカの太平洋における野心が燃えあがつた。

戦闘に不可欠なものがあつた。それが、「黒いダイヤモンド」である石炭だつた。石炭なしには、蒸気機関も、蒸気船も存立しなかつた。蒸気船海軍はよいとしても、いつたい石炭をどこで手に入れるのか。

答は、簡単だつた。太平洋の周辺から取れ、ということになつた。日本は石炭に富んでいた。もつとも、中国よりは少なかつた。そのために、当時、太平洋を横断する船のほとんどが、中国を最終の到達点とみなしていた。

石炭の存在が、ウェブスターをして、神の摂理に応える男に変えた。

ウェブスターは信心深かつたから、全能の神の御技に感動した。

神が九州の石炭をアメリカにお与えくださつたと、信じた。神がアメリカのために、日本の九州に石炭を貯蔵しておいてくださつたのだと、考えた。

その思いが、国務長官を行動に驅り立てた。ウェブスターは、こう記している。

「石炭は人類一家のために、万物の創造主から日本列島に置かれて、賦与された、主からの賜物である」

もつとも、人類一家といつても、異教徒はその家族に加わることができなかつた。

神の存在は、つねにアメリカの行動の原動力として存在してきた。いまで、アメリカ人の頭から創造主を、排除することはできない。

### ペリーの野望が結実した横須賀米海軍基地

ペリーは何ごとについても、真剣だった。行動の人だった。

もう一度、問い合わせたいのは、黒船と日本まで遠征する予算を正当化するために、ペリーは何をなぞうとしていたのか。

世界を一周して日本に辿り着かせて、帰国するまでに、蒸気艦を駆つても、一年かかる。私ははたと、ひらめいた。

ペリー艦隊はアメリカの基地を、探していたのだ。黒船の艦隊は、今日、アメリカが所有するものを探して、渡ってきたのだ。つまり、横須賀である。

今日、この横須賀海軍基地は、ほぼ、ペリーが黒船艦隊の錨を投げ入れた場所（投錨地）に位置し、アメリカ第七艦隊が母港としている。

第七艦隊のウェブサイトによれば、巨大原子力空母『ジョージ・ワシントン』をはじめ、およそ六〇隻から七〇隻のアメリカ艦艇と、一〇〇機から三〇〇機の先端をゆく軍用

機を擁している。海兵隊員を含めて、およそ四万人のアメリカ将兵が搭乗している。基地では、多くの日本人が働いている。

黒船はおよそ一五〇年前に、その先鞭をつけたのだ。

ペリーがアメリカのために発見したのが、横須賀だった。基地を占奪しようというのが、ペリーの目的だったのだ。

ペリーは江戸湾に投錨した最初の夜に、流れ星が夜空に輝いたのを目視した。ペリーは叫んだ。

「全能の神のお示しだ！ 古代人のうえに降りたのと同じものだ！」ペリーは神が共にいると、信じた。

ペリーは、日記にこう書いた。

「神がこの素晴らしい天地（日本）を、創造された。われらの試みが、これまで見離された人々（日本人）を（キリスト）文明へとお導きくださるように、祈ります。どうぞ事が成就しますように」

ペリーも白人キリスト教徒だけが文明世界の家族で、それ以外は孤児のような野蛮人だという、世界観に立脚していた。

## 世界一の文化都市だった江戸

二〇〇〇年以上の歴史を紡いできた日本が、ペリーが神に祈ったような未開な蛮地だったのだろうか。

「江戸の街は、美そのものだつた」

これはイギリスの使節オルコック（初代イギリス公使）の証言である。オルコックは日本では、馬の背に永遠に乗り続けても、なお「目を楽しませてくれる景色と、出会うことができる」と、記している。

彼だけではなかつた。一〇〇万人強の市民が、喜びにみちた生活を営んでいた。

地球上で最大の首都だった江戸は、絵画などのヴィジュアルアーツの世界でも、舞台芸術でも、きわめて高い芸術性を有していた。町人は支配階級だった武士よりも裕福だったし、街は文化財に溢れていた。江戸だけでなく、犯罪は日本中で驚くほど少なく、治安がきわめてよかつた。

江戸の庶民が、いかに豊かであつたか。東海道がおびただしい数の旅人によつて、利用された。この江戸と大阪を結んだ公道には、一〇〇〇軒を超える旅籠<sup>はたご</sup>があつた。欧米のユースホステルのようだが、欧米でも一〇〇〇軒以上ものホステルが軒を並べている街道は

ない。

町人が同業組合<sup>ギル</sup>を組織して、庶民こそが仕事をし、金を集め、江戸に繁栄をもたらした。町民が江戸を作り上げていた。彼らは、武士が金に困つた時に、頼つた相手だつた。

審美眼の持ち主は、裕福な町人のブルジョアだつた。二本差しの空威張りする武士は、質素な生活を重んじたが、絢爛たる文化を生むことには、貢献しなかつた。

廣重、歌麿、北斎などの木版画は、その後、ヴァンセント・ヴァン・ゴッホに代表されるパリのポスト印象派のあいだで、高く称賛されて、猿真似され、ジャポニズムとして西洋に深奥な影響を及ぼした。今日だつたら、意匠権の侵害として、訴訟になつていただろう。日本の絵画や舞台芸術は、武士階級が育てたのではなかつた。

もちろん、武士も審美眼を備えていた。幽玄な能樂は武士のものだつた。武士は歌人であり、書芸に秀でていた。だが、江戸文化の担い手は、庶民だつた。このようなことは、西洋でも、中国でも、インドでも、考えられなかつた。

ペリーは日本から戻つた数年後に、ニューヨークで講演した。「日本はいつの日か、他の国に追随を許さない産業国家として台頭しよう。彼らの手先は、あまりにも器用だ」と、述べた。

江戸が世界一の都市として繁栄した理由は、他にもあった。

教育だ。一六〇三（慶長八）年に江戸幕府が開かれ、江戸時代が幕を開けたが、幕政は治安さえ乱さないかぎり、庶民を自由に放任した。そして二五〇年以上も平和が続いたことが、重要な要因としてあった。

江戸時代の教育システムは、素晴らしいものだった。寺子屋だ。日本中に設立され、小学校として機能した。

日本が産業国家として、明治初頭にすみやかに離陸できたのは、庶民の教育水準がどの国よりも高かつたからだった。アジアの他の国々が欧米と比肩するには、一〇〇年以上かかりた。

男女児童に読み書きを教え、古典の知識を与え、德育を施すうえで、寺子屋がいかに偉大な存在であったことか、驚嘆させられる。もちろん、学ぶ意欲を旺盛に持った生徒が大勢いたから、寺子屋が発展したのだった。

なぜ、日本にだけ学ぶ熱情があつて、他のアジア地域になかったのか。このところ、中国や韓国においても、庶民のあいだに学ぶ熱情が見受けられる。これは、日本が手本を示したものだった。もつとも現在、日本ではそのようなハングリーパーク精神が、失われている。

歌舞伎ほど、江戸の榮華について、江戸という時代を物語るものはない。この劇場芸術

は、時代精神の現われそのものだった。歌舞伎というと、スケールがすべて壮大になる。ステージが大きい。ミラノのカラ座よりも、歌舞伎の舞台のほうが大きい。

歌舞伎の舞台の左袖には、細長い道がある。花道と呼ばれて、主演役者が歩いてみせる。

江戸の日本は、豊かな心と財産を持つた男たちによって、支配されていた。精巧で小さなスケールの人形劇である文楽も、そうだ。十七世紀にどこからともなく現われて、人気を博した。

貴族階級と、支配者である武士階級の劇場は、能だった。

庶民にとつては、歌舞伎だった。その豪華な衣装、三味線、即席演奏、歌舞伎と文楽のペアに並ぶものは、世界のどこにも存在しない。どちらも、庶民のものだった。

江戸によほどの富が、存在していたのである。

### アメリカ人が持っていたひどい偏見

他方、アメリカでは江戸時代が邪悪な時代だったという意見が、根強かつた。

サミニュエル・モリソン提督も、そうだった。アメリカ海軍の著名な太平洋戦史家で、一五巻の大著を上梓した。

モリソンには江戸時代の日本の後進性は、すべてを排除すべきものとして、映つた。

「徳川家康将軍が一六〇三年に鎖国政策を実施した後に、社会の全てがそれまでとまったく同じままに、とり残された。

人々は昔からの手作りの衣服を着て、固定した階級のなかに、閉じこめられた。  
二六〇人の大名は、藩の中でしたいことをしていた。従者によつて運ばれる漆塗りの椅子駕籠で、旅行をした。駕籠の行く手を塞いだり、恭順の礼をしなかつた民衆は、サムライによつてその場で斬られるか、殺された。

世襲による戦士階級であるサムライは、藩主の食扶持で生きていたが、大多数が貧しかつた。剣術を除けば、全てについて無教養だつた。藩主と古い慣習と伝統に対しても、サムライによつてその場で斬られるか、殺された。

何という偏見だろうか。このような態度は、どこに由来したのか？ 確かに、武士は工

リート階級だつた（彼らは歌舞伎を観なかつた）。だが、日本の人口の九〇パーセント以上が庶民で、彼らが日本の都市文化の担い手だつたのだ。  
近松門左衛門の世話物、井原西鶴の小説がその例だ。西洋では、演劇や小説の主人公はみな王侯貴族だつたが、世話物の登場人物は庶民だつた。江戸はその文化の深みにおいても、世界一だつた。

本の需要は、厖大だつた。ベストセラーが何冊も出て、一〇万部を超えることも珍しくなかつた。

モリソンの指摘とまつたく対照的に、当時の日本は平等社会だつた。日本では昔からそういうであつたことは、安土桃山時代のイエズス会の記録から、判断できる。

フランシスコ・ザビエルは当時の日本について、「ここ日本では、女性や子供までもが

読み書きができる」と驚いて、本部に報告している。

モリソンは、彼の「ヒーロー」であるペリーの目で、世界を見ていた。

今日の東京は四万六〇〇〇人の警察官によつて守られている。江戸では七〇万人の町人に対して、武士の町方同心と呼ばれる警察官と、町人の岡つ引きを含めて、わずか六〇人しかいなかつた。岡つ引きの下で、情報を集める下つ引きを加えても三〇〇人だつた。そ

れほど、治安がよかつた。

人々の道徳性が、きわめて高かつた。近隣の人々は、お互に助け合うことを、誇りにした。

### 日本という獲物を虎視眈眈と狙う列強

ペリーのしたことは、日本の法律では、犯罪行為だつた。日本はペリーの来寇を、できるだけ穩便に処理しようとした。日本はどうてい対抗できる軍事力を、持つていなかつた。

黒船の『サスケハナ』と『ミシシッピ』は、合わせて一〇門のシェル・ガンを載せていた。

日本人は深く憤つた。アメリカ人がアメリカを神の国だと思つていたように、日本も神州だつた。

四隻の黒船のうちの一隻——『サスケハナ』と、ペリーの指揮下でメキシコ戦争を戦つた『ミシシッピ』の八メートルもの高さがある黒い煙突が、船体に突きささつているようにみえた。黒船艦隊のこの一隻が黒煙を吐いて、滑るように浦賀水道から江戸湾に入つた。

速度は八ノットから九ノットだつた。いかなる日本の船も、蒸気船に追い付くことができなかつた。ペリーは江戸湾で、『サスケハナ』と『ミシシッピ』を、旗艦として交互に用いていた。

しかし、ペリーだけを犯罪者扱いするのは、公平を欠くだらう。当時、全世界で西洋の植民地支配が行なわれていた。

黒船艦隊の船員たちは、マラッカ海峡などを通る道すがら、その様子を目の当たりにした。

サー・スタンフォード・ラッフェルズが大英帝国の辺境の植民地の基軸として目をつけたシンガポールのウォーターフロントは、わずか一五年で活気に満ち溢れ、商業活動で沸きかえつていた。

キリスト教の「神の所有物」と名づけられた小さな倉庫が、岸に沿つてひしめき、イギリス式の俱楽部やパブ、貿易会社が軒を連ね、蒸気船が停泊していた。

香港も、同じだつた。ペリーの黒船艦隊は香港で、はじめてタスクフォースとして結成された。必要な準備が行なわれ、物資が積み込まれた。

香港の貿易ビジネスに携わる商人たちから、情報を収集した。日本では銅貨がすべての

交易に使用されていると知つて、ペリーは五トンの銅貨を買い込んだ。四隻の艦隊のうち、帆船二隻が、糧食や物資を運ぶ任務を担つた。

黒船艦隊が次の停泊地である上海に到着すると、同じことが行なわれた。

上海は、香港や、シンガポールに比べると、大英帝国の支配力はやや弱かつた。ヨーロッパ各国のバックグラウンドを持つ貿易会社が軒を連ねて、競争していた。港には、大英帝国や、フランスや、ドイツをはじめとする国の軍艦が、それぞれの国旗をひるがえしていた。

アジアは植民地支配の新たな獲物として、燃えあがつていた。  
西洋人にとってアジアには、中国にも、インドにも、インドネシアにも、国境線がまつたく存在しなかつた。原住民は、人として扱われなかつた。

ヨーロッパ各国にとって、早い者勝ちの状況だつた。ルールは、弱肉強食だつた。良心の呵責はなかつた。白人優位の世界観が確立してから、アジア・アフリカを侵略するのは、白人の特権だと信じられた。

そのような獲物の世界に、いまだ姿を見せていなかつたのが、日本だつた。  
日本は誇り高い、棘がある地だと見られていた。だが日本は、誇りがなく利己的な中国

人や、インド人と違つていた。日本人は旺盛な独立の精神を、いだいていた。  
浦賀の丘の上から、黒船を眺めていた見物人が、「夜の帳とぼりが降りると、寺の鐘かねが連打された」と、記している。

いつたい、誰が寺の鐘を鳴らしたのか。誰かが篝火かがりびをたいたのか、火を灯し、さらに別人が火を灯し、それが次々と広がつた。

西洋の植民主義者のあいだでは、遅かれ早かれ、ヨーロッパの大国のどこかが、日本を奪うだらうと、緊張感が高まつていた。  
ペリーはロシアを主要なライバルとして、警戒していた。どの大国も日本が食われるために、そこにあると、感じていた。

### 「レイブ・オブ・江戸」

最近になつて、ペリーとマッカーサー元帥を比較して、歴史上の位置づけをしようとする動きがある。

私は二年前に、妻から、精神分析家で思想家、現代史家である岸田秀氏きしだしゅうの論考を紹介された。私はペリーについて研究していたから、私と同じ視点で、黒船をとらえる岸田氏に

共感した。

岸田氏は、ペリーに「レイプ・オブ・江戸」（江戸の凌辱）の罪があると、論じている。さらに、マッカーサーが追随して、日本をレイプしたともいう。

岸田氏は一九三七（昭和十二）年に、日本軍によつて行なわれたと、第二次大戦の戦勝国が主張する南京大虐殺に呼応して、「レイプ・オブ・江戸」という表現を用いたのだった。

加瀬氏が会長を務める「南京事件の真実を検証する会」は、南京大虐殺事件はまつたくの虚構で、戦勝国が東京裁判で自らの罪と相殺させる目的で捏造したとして、徹底的な検証を行なつてゐる。英文でその研究成果が発表されており、「史実を世界に発信する会」のサイトで、閲覧できる。

たしかに、太平洋戦争の「戦争犯罪人」を裁いた極東国際軍事法廷——いわゆる東京裁判は、「勝者の正義」を宣伝するための茶番劇だった。

岸田氏は、「日本はレイプ（強姦）された。最初はペリー提督によつて、後にマッカーサー元帥によつて」と、主張する。アメリカ人には、さぞ不快なことだろう。

私は岸田秀氏の著書『日本がアメリカを赦す日』（毎日新聞社、一〇〇一年、後に文春文

庫）を、親しい友人のドナルド・キーンに紹介した。キーンは太平洋戦争時のアメリカ日本語将校で、後にコロンビア大学教授となつた。

二〇一二年日本に帰化したキーンは、「日米関係の歴史を、すべて書きなおす時がきているのだろうか。私はもう時効だといいたい。アメリカのアカデミアが不本意ながらも、同意することを、誰が期待できるだろうか。

私が日本とアメリカを行つたり来たりして過ごした五〇年ほどの間、このような声はまったくなく、現在にいたつてゐる」と、断じた。

一般に認められているように、突然（しかも日本の法律を破つて）ではあるが、日本はペリーのお蔭で、外の世界に向けて「開国」できた。もつともペリーでなかつたとしても、どこかの国が、日本の門扉をこじ開けただろう。

イギリスは、アヘン戦争後、中国を裁断しつつあつた。フランスはインドシナの大部分を獲得しても、なお物足りなく、さらに野望を燃やしていた。ドイツは出遅れたが、ハングリーだつた。ロシアは樺太の一部を、略取していた。

白人諸国は、有色人種の諸国を食い散らかそうとする衝動を、まったく失うことなく、アジアで争奪戦を展開していた。

ペリーは即刻行動しなければ、アジアは他の白人国家によつて、すべて植民地とされてしまふと、焦つた。

アメリカは太平洋がアメリカのもので、アメリカの庭に永遠にある池ほどにしか、思つていなかつた。あたかも、自國の領土であるかのように、日本に乱入することに臆するこ<sup>おも</sup>とがなかつた。

表現がえげつないが、処女を奪い去られるべくして、そこに横たわつていた。アメリカは素早くベッドに入つて、眠れる姫をレイプした。そして、何事もなかつたかのように装い、今日にいたつている。

### わざわざペリー艦隊の艦旗を取り寄せたマッカーサー

太平洋は世界の七つの海のなかで、もつとも大きい大洋だ。

先の大戦は日本から西洋に、戦争を仕掛けたのではない。アジアは、シャム王国（現タイ王国）と、ネパールと、日本を除いて、すべてヨーロッパと、アメリカの植民地だつた。中国は、半植民地状態にあつた。

シャム王国とネパールは、ヨーロッパ各国がアジアでの領土獲得合戦を展開した緩衝地

帶として、残つていた。唯一つ、独立国家として残つていたのが、日本だつた。

マクロにアジア史を見ると、ペリーと一〇〇年後に日本に降伏文書への署名を強いたマッカーサーの位置づけが、ハッキリとする。戦争の責任は第一義的に、アメリカにあつた。

二人はどうちらも、自己顯示欲に満ちていた。コーンパイプを銜え、サングラスを付け、古代ローマの格闘士のよ<sup>あ</sup>うな顎<sup>あご</sup>をもつたマッカーサー。かたや、ペリーは、ブロードウェイのプロデューサーを彷彿<sup>ぼうふ</sup>とさせる。

マッカーサーはペリーを意識し、自らの姿を重ねた。

降伏文書調印式は、一九四五（昭和二十）年九月二日に行なわれた。マッカーサーはペリーが浦賀に黒船艦隊を率いて、来航した時に掲げた旗の現物を、アメリカ本土のアナボリスにある海軍兵学校から、その日一日だけの催しのために、わざわざ取り寄せた。

調印式の場所は、戦艦『ミズーリ』号艦上で挙行された。マッカーサーはアメリカ国民に対して、自分をペリーの再来であるかのように演じてみせた。

アメリカは一八五三（嘉永六）年にペリーが目的としたアメリカ海軍基地を、ついに手

に入れることができた。それが、アメリカの横須賀海軍基地である。

アメリカ人は、派手な演出を好む。ペリーの艦隊の星条旗を掲げることで、一世紀を隔てて、その悲願を達成したことを演出した。

## 第2章 ペリーが開けた「パンドラの箱」

## パリ講和会議における日本の人種差別撤廃提案

この五〇〇年の世界史は、白人の欧米キリスト教諸国が、有色民族の国を植民地支配した、壮大なドラマだった。

そのなかにあって、その流れに影響されることなく、神の奇跡のように取り残されたのが、日本という世界史に比類ない国家だった。

江戸時代の日本は封建時代だったと、世界史のなかで一様に位置付けられている。しかし、庶民の文化によって栄えていた。

たしかに、士農工商の上下関係の区別はあったが、きわめて平等な社会だった。今日の文明世界でも信じることができないような、安全で、平和な社会があつた。

おそらくこのような世界の外にみられない平等主義は、日本人が古代から尊んでいた、「和」の心から発するものだろう。「和」は、日本に独特なものだ。

江戸は当時の世界最大の都市国家で、平和で、平等な社会が実現していたと、述べた。この日本人の平等の精神が、第一次世界大戦後に行なわれたパリ講和会議においても、発揮されたことは、特筆に値する。

第一次大戦に勝った連合国が、一九一九（大正八）年一月からパリに集い、ドイツにど

のような条件を課するか、討議したのがパリ講和会議である。日本も連合国の一員だった。

この会議では、各国首脳が講和だけでなく、国際連盟の創設を含めた、大戦後の新たな国際体制づくりについても、協議した。

日本は二月十三日の国際連盟委員会で、「各国民均等の主権は国際連盟の基本的綱領」であるべきであつて、「連盟員たる国家における一切の外国人に対し、いかなる点についても均等公正の待遇を与え、人種あるいは国籍の如何により、法律上あるいは事実上、何ら差別を設けざることを約す」という条文を、宗教の平等を唱えた連盟規約二十一條に付け加えるように、提案した。すると、宗教規定そのものが取り除かれて、人種差別撤廃提案として、改めて提出された。

アメリカのウイルソン大統領が、議長だった。こうした動きに対し、アメリカでは内政干涉だとして、強く反発した。アメリカでは黒人を「ニガー」と呼んで、法的にも、社会的にも差別していた。アメリカ上院は提案が採択されれば、条約を批准しないという決議を行なつた。

白蒙主義のオーストラリアのヒューズ首相も、不快を示すために、退席するほど強硬だ

つた。日本の主張が入れられれば、署名を拒否して帰国すると、発表した。

アメリカも、オーストラリアも、イギリスも、人種差別のうえに築かれた国だつた。

日本は四月十一日に再提案を行ない、連盟規約の前文に「各国民の平等及びその所属、各人にに対する公正待遇の主義を是認」という文言を、挿入するように求めた。

イギリス、オーストラリアが反対するなか、ウィルソン大統領は「本件は、平静に取り扱うべき問題である」として、日本代表団に提案の撤回を求めた。

ところが、日本代表団の牧野伸顕元外相はそれに従わず、採択を求めた。イギリス、ア

メリカ、ポーランド、ブラジル、ルーマニアなどが反対したものの、出席一六カ国中セル

ビアをはじめとする一一カ国の小国が賛成し、圧倒的多数をもつて、可決された。

だが、ウィルソン大統領はあろうことか、「全会一致でない」として、この採決を無効とした。

牧野は多数決による採択を受け入れるように求めたが、ウィルソンは「本件のごとき重大な案件については、従来とも全会一致、少なくとも反対者がいないことによつて議事を進めるべきだ」といつて、これまでも重大案件については、全会一致で決議してきたといつて、反論した。牧野も渋々、これを受け入れざるをえなかつた。

牧野はその代わりに議案を撤回する条件として、人種平等の原則を盛り込む提案を行なつたという事実と、採決の記録を議事録に残すことを求め、受け入れられた。

今までこそ、黒人がアメリカ合衆国大統領になつてゐる。しかし、そのようなことは、かつて想像だにできなかつた。

黒人はアフリカから奴隸として連れてこられ、物のように売り買ひされた。家畜とまつたく同じ扱いだつた。

白人は有色人種を、同じ人間として扱つてはいなかつた。もつとも、白人男性によつて黒人女性が性奴隸として扱われていたから、この点では「準人間扱い」されていたといえないこともない。だから、今日、白人の血が流れていらない黒人奴隸の子孫は、アメリカに一人としている。

いまでは南北アメリカ大陸も、西洋史では「新大陸発見」となるが、まさか、突然のよう両大陸が隆起して、出現したわけではない。大陸はもともと、そこにあつた。北アメリカには、インディアンという先住民族が、住んでいた。もともといた有色人種の非キリスト教民族を、まるで野獣狩りでもするかのように冷血に虐殺して、白人キリスト教国家を建設したのが、アメリカである。

南アメリカでも、同様のことが起つた。アジアにおいても、白人キリスト教国家が有色民族諸国に対して侵略を働き、植民地支配による搾取と、差別が行なわれた。

日本人も、白人ではない。有色民族である。こうした白人の横暴を、同じ有色民族として、誇りある日本人は看過することができなかつた。

パリ講和会議において、牧野が人種差別撤廃提案を行なつた背景には、こうした目を覆うべき霸道世界の醜い現実があつた。

人種差別撤廃の提案が、十一対五の圧倒的多数で可決されたにもかかわらず、ウイルソン大統領は、「全会一致でない」として、この決定を葬つたのだつた。今日の文明世界では、ありえないことである。

### 三〇〇年以上、スペインの支配下にあつたフィリピン

白人キリスト教徒のアジア侵略に対して、アジアの国々で、どのようなことが起つたのだろうか。

フィリピンは十九世紀末からアメリカによつて支配されたが、その前はスペインの植民地だつた。

コロンブスがアメリカ大陸を「発見」したのが一四九二年だつたが、このころスペインはポルトガルと、世界征服を競いあつていた。

有名なマゼランは、ポルトガルで生まれ、二十五歳のころ東回りの遠征に参加して、マレー半島まで到達した。

その後、国籍をスペインに変えて、旗艦『トリニダッド』号と五隻によつて構成される艦隊と二三七人の隊員を率いて、一五一九年九月二十日に、西回りの遠征に出発した。

平和な大洋——「パシフィコ」と自ら名付けた大海を、三ヶ月と二〇日かけて渡り、一五二一年三月十六日の夕方に、ついにフィリピンに到着した。その日は、レイテ湾の入り口にあるスルアン島沖に、錨を降ろした。

ちなみに、この投錨地には、その四二三年後の一九四四（昭和十九）年十月十七日、先の大戦中に日本の手によつて独立を獲得したフィリピンに、アメリカ軍が侵攻した時の最初の上陸地点となつてゐる。

マゼランは翌日、レイテ湾に浮かぶオモンオン島に、二十八日にはリマサワ島に上陸した。復活祭の日曜日である三十一日には、「最初のミサ」を挙行している。

マゼランはその日の夕方、海を見下ろす丘の上に十字架を立て、フィリピン諸島を「サ

ン・ラザルス諸島」と、命名した。フィリピンに到着した三月十六日が、聖ラザロの安息日であつたからだつた。

マゼランは聖なる使命を記念する儀式が、一段落したのを受けて、四月七日にセブ島に到着し、沖合から大砲をいつせいに発射した。

マゼランは武力によって威圧したうえで、セブ王フマボンとその日のうちに同盟関係を結ぶと、一気にキリスト教の布教を開始した。一日でフマボン王妃、皇太子を含め八〇〇人あまり、数日のうちに二三〇〇人以上の洗礼が行なわれた。

セブ島を攻略したマゼランは、さらに近くのマクタン島へと触手を伸ばした。マゼランはセブ王に、もしセブ王フマボンに刃向かう者があれば、共に戦うと約束していた。

マゼランがセブ王に従属するようになると要求したのに対して、マクタン島のラプラプ首長は、「私はいかなる王にも、いかなる権力にも従わないし、貢物もしない。もしわれわれに敵が向かって来るなら、竹と棍棒で生命をかけて戦う」と言つて、拒んだ。

マゼランは怒つて、部下六〇人とフマボン王の手下を一〇〇〇人率いて、四月二十六日の真夜中にマクタン島へ向かつた。浅瀬と珊瑚礁のために海岸へ近づけなかつたので、翌朝、マゼランは四九人の銃兵を従えて海岸に近づき、一斉射撃を行なつた。

ところが、ラプラプ軍は一向にひるまなかつた。銃弾を盾で防ぎながら、数百の矢を放

つた。マゼランは民家に火を放つた。これが、かえつて勇猛なラプラプ軍の勇士の闘志を燃えあがらせ、ラプラプ軍の攻撃が

激化した。

ついに、一本の毒矢がマゼランの右足を貫いた。

マゼランはこれが致命傷となつて、最期を遂げた。最後のとどめとして、ラプラプがマゼランの首を、切り落としたという。

西洋史では、マゼランが世界一周の快挙に挑戦し、太平洋を横断して、フィリピンにいたり、不運にも土人に殺された、という話になつている。しかし、これは西洋史から見た史觀である。

フィリピンの歴史教科書の記述は、当然のことと異なる。

「マクタンの戦いは、フィリピン人が外国の侵略者から独立を守ることに、はじめて成功した誇らしい記録である」

その後、フィリピンはスペインによつて三百数十年間（その間、一七六二年より二年間は、イギリスの支配下）にわたつて植民地支配を受け、その後、スペイン軍が一八九八年

八月十三日に、来攻したアメリカ軍に降伏した。

十二月十日にパリで、アメリカとスペインの間で条約が締結されて、フィリピン人の意志をまったく顧慮することなく、一八九九（明治二十二）年フィリピンはアメリカの領土になつた。

### 白人不敗神話の終焉と日本

その後の四十数年、アメリカはフィリピンを植民地支配した。ちなみに当時のアメリカ軍司令官は、日本を占領したダグラス・マッカーサー元帥の父親だつた。

フィリピンでは、スペイン、イギリス、アメリカの支配下にあつて、その植民地支配に對して多くの反乱が起つて、抵抗が休みなく続けられた。

フィリピン独立の決定的なターニングポイントは、日本軍が一九四一（昭和十六）年にフィリピンに上陸して、軍政を施した時に訪れた。

当時、父親の後を継いで、フィリピンにいたダグラス・マッカーサーは、「アイ・シャル・リターン」という、有名な逃げ口上を残して、オーストラリアへ脱出した。

マッカーサーは自己中心主義者だつたから、民主主義国の軍人なら「ウイ・シャル」と

言うべきだつたのに、「アイ・シャル・リターン」と言つた。

日本は一九四三（昭和十八）年に、フィリピンを独立させた。

一九四五（昭和二十）年八月十五日に、日本は戦闘行為を停止じた。アメリカ製のフィリピン共和国が独立をしたのは、その翌年の一九四六（昭和二十二）年だつた。だが、独立の氣概をフィリピン国民に与えたのは、日本だつた。

フィリピン大学歴史学部のレティシア・R・コンスタンティーノ教授は、著書のなかに「白人不敗神話の終焉」という章を設けて、次のように述べている。

「東アジアに対する日本の軍事進出は、いろいろの意味で、アジアに解放をもたらす力を、存分なまでふるつた。

日本帝国の軍隊が、香港、ビルマ、インドシナ、インドといった、西側帝国主義の要塞をつぎつぎと攻略していく素早さは、それまで白人は不敗と信じていた諸民族を、驚愕させた」

白人の不敗神話を崩壊させたことでは、まず日露戦争の日本の勝利が世界に与えた衝撃

が、大きかつた。

しかし、コンスタンティーノ教授が指摘するように、第二次世界大戦（日本側は、この戦争を「大東亜戦争」と命名している）における日本軍の緒戦の目覚ましい勝利が、白人の不敗神話という幻想を、完膚なきまでに叩きつぶしたことが、フィリピン人に大きな衝撃を与えた。希望をいだかせた。

日本はそれまでの白人の支配者とちがつて、アジア諸国民に民族自決の精神を涵養した。日本人は幕末から明治にかけて、西洋の列強によって不平等条約を強要された屈辱を、忘れていた。日本はアジアの国造りに取り組み、日本軍は現地の青年たちに軍事訓練を施した。このことが、フィリピンをはじめ、アジア諸国が独立するのに当たつて、強力な援けとなつた。

幕末の日本人は、白人だけが人間だと信じる、キリスト教徒による暴虐な殺人と略奪が、アジアにおいて次々と続いたのを、知っていた。だから、ペリーの黒船艦隊が浦賀に出現した時に、江戸の衝撃が大きかつたことが、想像できる。

しかも、黒船はシエル・ガンという先端兵器を搭載した、蒸気船だつた。

### インドネシア独立に果たした日本の功績

インドネシアの植民地支配は、一五九六年にオランダがジャワに艦隊を派遣したことが始まる。インドネシア人は悲しいことに、抵抗する術を持たなかつた。オランダは一六〇二年に、東インド会社を設立した。その七年後に、ジャワにオランダ総督府を開設した。オランダの三五〇年あまりにわたるインドネシア支配に終止符が打たれたのは、やはり、一九四二（昭和十七）年の日本軍の侵攻によるものだつた。

インドネシアにあつたオランダ軍は、生命惜しきに、わずか七日間で降伏してしまつた。

インドネシアには、太古の昔から、白馬に跨る英雄が率いる神兵がやつてきて、インドネシアの独立を援けてくれる、という伝説があつた。日本軍の侵攻は、まさに伝説の神兵の到来を思わせた。日本兵は、神話の軍隊だつた。

ジョージ・S・カナヘレは、著書『日本軍政とインドネシア独立』のなかで、日本の果たした役割として、次の四点を掲げている。

一、オランダ語や、英語を禁止した。このために、公用語としてインドネシア語が普及

した。

二、青年に軍事訓練を課し、厳しい規律や、忍耐心を教え、勇猛心を植えつけた。

三、オランダ人を一掃し、インドネシア人に高い地位を与え、能力と責任感を身につけさせた。

四、ジャワにブートラ（民族結集組織）や、ホーコーカイ（奉公会）の本部を置き、国土の隅々まで支部を作り、組織の運営方法を教えた。

それまで、インドネシアにおける公用語は、オランダ語だつた。

日本は第二次大戦で、アジアの国々を侵略したとされている。

しかし、どうして侵略をする国が、侵略をされた国の青年に軍事教練を施し、精神力を鍛え、高い地位を与え、民族が結集する組織を全国にわたつて作り、近代組織の経営方法を教えるということがあらうか？

この事実はとりもなおさず、侵略したのが日本ではなかつたことを、証明している。

日本がアジアの国々を侵略していた西洋諸国から、アジアの国々を独立させるために、あらゆる努力を惜しまなかつたと見るのが、正しい認識であると思える。

もちろん、日本は「自存」のために、大東亜戦争を戦つたのであつて、アジアの解放の

ために戦つたのではなかつた。しかし、いつたん戦端が開かれると、アジア人のためのアジアを創造する強い情熱に駆られたことも、事実である。これこそ、日本人による大きな国際貢献だつた。

### 独立記念日の日付は、なぜ05817なのか

日本軍はインドネシアにおいて、PETAを創設した。PETAは「祖国防衛義勇軍」の略称であつて、隊員が三万八〇〇〇人を数えた。独立後のスハルト大統領、ウマル副大統領、スロノ国防相をはじめとする多くのリーダーが、PETAの出身である。PETAは、後のインドネシア国軍の母体となつた。

日本は一九四五（昭和二十）年八月十五日に敗れたが、インドネシアでは、八月十七日にハッタとスカルノによつて、独立宣言が発せられた。

敗れた日本軍は、戦勝国による日本に対する報復を恐れて、ハッタとスカルノが独立を宣言するのに強く反対した。しかし、二人は独立宣言を、強行した。

ちなみに、インドネシアの記念すべき独立の日は、「〇五年八月一七日」となつてい る。〇五年は、インドネシアのイスラム暦ではない。もちろん、イスラム教徒であるイン

ドネシア人が、植民地支配者のキリスト暦を用いるはずがなかつた。

では、○五は何であろうか。ジャカルタの中心にあるムルデカ（独立）広場に、ハッタとスカルノの全身像とともに、高さ二七メートルの独立記念塔が聳え立つてゐる。碑には、独立宣言文と、05817という日付が刻まれてゐる。

この塔の地下一階の扉の奥に、独立宣言書の実物が納められている。ハッタとスカルノによつて、一九四五年八月十七日に署名されたものである。そこにもハッキリと、05817と記されている。

○五年は、日本の「<sup>インペリアルカレンダー</sup>皇紀」なのだ。日本を建国した神武天皇が即位した年から数えて西暦一九四五年は、<sup>じんむ</sup>皇紀二六〇五年にあたつた。

ハッタとスカルノは日本に感謝して、皇紀を採用したのだつた。インドネシアの独立は、その生みの親となつた日本の「天皇の暦」によつて、祝福されたのだつた。

もし、仮に日本がインドネシアを侵略したのだつたならば、インドネシア国民が国家の独立を宣言した日として、「皇紀」を使って日付を入れることは、絶対になかつたろう。

この事実ひとつを取つてみても、日本がアジアに対して侵略戦争を行なつたという、歐米の歴史認識は根底から、音を立てて崩れる。

それなのに、今日の日本では、日本がアジアを侵略したと信じてゐる国民が多いのは、なぜだろうか。敗戦後の日本人の商売熱心には感心させられるが、このような日本人は戦勝国や、日本を嫌つてゐる国々へ、自国の歴史も売つたのも同然だらう。

今日、市ヶ谷の日本の防衛省の構内には、インドネシア政府によつてインドネシア独立軍司令官だつたスティルマン将軍の銅像が寄贈されて、立つてゐる。スティルマンも、PETAの出身だつた。かつて連合国が日本に対する報復として、非合法な東京裁判を行なつた場所でもある。

敗戦国となつた日本で東京裁判が行なわれたが、日本は「平和に対する罪」という、それまで国際法になかつた「罪」によつて裁かれていた、まさにそのとき、インドネシアで何が起つていたのだろうか？

## インドネシア独立戦争で戦死した一〇〇〇人の日本兵

日本の降伏後、インドネシアの全国民のあいだには、独立の気概が燃え上がつてゐた。そこに、なんとオランダが軍隊を立て直し、もう一度、植民地支配をしようとして、印度ネシアに侵攻した。

かつてのオランダ支配下で、インドネシア人は羊のように従順だったから、今度もさしたる抵抗はあるまいと、みくびつていたのである。

ところが、日本の手によつて建軍されたP E T Aが中心となつて、独立戦争のために立ち上がつた。だが、独立戦争を戦うには、武器が必要だつた。

連合国軍の東南アジア総司令官マウントバッテン提督と日本の南方総軍が、日本軍の武装解除を定めた降伏協定を結んでいた。そのために、日本軍はインドネシアの同志に、武器を与えることができなかつた。

日本人は「白魔」——日本では幕末から、白人がそう呼ばれていた——からの「アジア解放」を願い、インドネシア国民の独立精神を培つたから、本心ではインドネシアの独立に協力したかつた。そこで、日本軍は武器を奪われたふりをしたり、故意に置き忘れたりして、独立軍に武器を供給した。

日本軍は敗れる前に、インドネシア青年に飛行機の操縦も、教えていた。日本は海上封鎖を受けて、本土で石油が欠乏したために、航空兵の養成の目的で、油田のあるインドネシアに、多くの初級練習機を運び込んでいた。

独立戦争におけるジャワ島の戦いでは、旧日本軍の一機翼の練習機が、胴体の日の丸の

半分を白く塗りつぶし、爆撃装置がなかつたために、眼下のオランダ軍に手擱みで、爆弾を見舞つた。インドネシア国旗は、赤白の二色である。

この日の丸が塗り替えられた練習機が、いまもジャカルタの軍事博物館の庭に、誇らしげに展示されている。

中部ジャワのスマランでは、共産党過激派が武装集団を組んで、共産党下の独立をはかつっていた。共産党によつて「日本軍は連合軍の手先となつて、インドネシアの独立を妨げる敵だ」とか、「日本人は水道に毒を入れた」などのデマが広がつた。

インドネシア共産党は日本軍が反撃できないことを知つて、日本軍から武器を奪い、日本の民間人を殺害した。中部ジャワ地区の防衛司令官官邸が襲撃され、旅團長が監禁され、日本海軍将兵三人が拉致された。

スマランの治安に当たつていた歩兵第四十二連隊の大隊が、仕方なく戦闘を開始した。

治安の回復と、拉致日本人の救出が目的だつた。部隊が共産党過激派の拠点を占領して、日本人が収容されていたブルー刑務所に突入し、日本人三〇〇人あまりを救出した。だが、一三〇人の日本人が、惨殺されていた。

ブルー刑務所には、日本の軍人軍属、民間人が小さな部屋に三五人ずつ、四〇〇人あま

りがとらわれていた。オランダ人や、オランダ・インドネシアの混血人も収容されていた。

日本兵が突入をはかると、共産党は日本軍から奪つた機関銃で、攻撃してきた。それを制圧して、なかに入ると、どの部屋も血の海のなかに、死体が折り重なっていた。竹槍で突き刺されたうえで、手榴弾が投げ込まれていた。

日本人は息を引き取りつつも、壁に思いを書き遺した。寺垣俊雄司令官は「大義に死す」と、血書していた。ほかにも「天皇陛下万歳」「インドネシア独立万歳」「バハギアインドネシア ムルデカ（インドネシア語でインドネシア独立万歳）」など、血文字が壁に書かれていた。

当時の日本人にとって、アジア解放は大義だつた。いまの日本人に、そのような気概があるだろうか。国際協力だとか、国際貢献だといって、政府の予算をもらつてバラまくことによって生計をたてて、自己満足に浸つている日本人が多い。

今日、日本がアジア諸国から尊敬されなくなつたのは、アメリカに追従して、経済利益だけを追求して、先の大戦に敗れるまでいだいていた氣高い精神を、失つたからにちがいない。歴史を失つた国には、品格がない。

ジャカルタの郊外のカリバタ英雄墓地には、日本が降伏した後に、インドネシア独立軍に身を投じて、イギリス、オランダ軍に對して独立戦争を戦つた多くの日本兵が葬られている。これらの日本人にとっては、日本が降伏しても、まだ「大東亜戦争」は終わつていなかつたのだった。

インドネシアの独立戦争では、日本が降伏した後に、二〇〇〇人といわれる日本兵がインドネシアに残つて、インドネシアの人々とともに戦い、半数が戦死した。

ベトナムにも、フランス軍がフランスの植民地に再びしようとして、来襲した。多数の日本兵が残留して、ベトナム独立のために血を流した。

### イギリスのインド支配とチャンドラ・ボース

インドではイギリスが一六〇〇年に東インド会社を設立して、インドの植民地化に着手した。

イギリスはマドラス（一六三九年）、ボンベイ（一六六一年）、カルカツ（一六九〇年）に東印度会社をつくり、イギリス領とした。

侵略は、さらに続いた。プラッシーの戦い（一七五七年）、カルナータカ戦争（一七六三年）

年)、ブクサールの戦い(一七六四年)、マイソール戦争(一七九九年)、マラータ戦争(一八一九年)、シーカ戦争(一八四五年)によって、支配地域を拡げた。

一八五七年から五九年にかけて、反イギリス民族闘争である、有名なセポイの反乱が起つた。

日本の明治維新は、一八六七(慶應三)年だつた。インドでは一八六九(明治二)年に、マハトマ・ガンジーが生まれた。一八七七(明治十)年に、イギリスが直接インド全土を統治するインド帝国が、成立した。ビクトリア女王が「インド皇帝」として、即位した。一八九七(明治三十)年に、チャンドラ・ボースが生まれた。

イギリスの植民地支配に対して、無抵抗主義を貫いたのが、マハトマ・ガンジーだつた。マハトマは、「聖者」を意味する。

ボースはガンジーと対照的に、武闘派だつた。ボースは前大戦中に、日本に援けられて、インド国民軍(INA)を結成して、司令官として戦つた。ボースはインドで今までも「ネタージ」(偉大な指導者)と呼ばれ、生誕地のベンガル地方で英雄として、崇められている。

ボースは名家に生まれ、三十三歳でカルカッタ(現コルカタ)市長、四十一歳でガンジ

ー、ネールと並んで、国民会議派の議長となつた。

イギリス統治下で、インド各地に建てられたイギリスの記念物や、銅像を破壊、撤去する運動によって投獄されたが、脱走した。アフガニスタンを徒步で踏破して、遠くドイツまで逃れた。ドイツでは厚遇された。在留インド人や、アフリカ戦線に送られていた英印軍のインド人捕虜を集めて、義勇軍を組織した。

ボースはヒトラーと、会見した。この時、インド独立を支援する声明を出してもらひたいと依頼したが、ヒトラーに「インドが自治政府を持つには、あと一五〇年はかかるだろう」と、冷たくあしらわれた。ヒトラーはボースを反英工作に利用したかつたが、ヒトラーは白人優越主義の優等生であつて、アジア人を劣等人間として見下していたから、印度独立は念頭になかった。

東條英機首相はシンガポール陥落後に帝国議会において、「インドもイギリスの暴虐なる圧制下から脱出して、大東亜共栄圏に参加すべき絶好の秋である」と、演説した。

## 日比谷公会堂で行なわれたボースの演説

その年、一九四二年にインドで、「八月事件」が起つた。「イギリスよ、出て行け」と

いう国民會議派の決議に對して、全土にわたつて、反英デモが挙行された。イギリスはスピットファイアー戦闘機を飛ばして、上空から群衆に機銃掃射を加え、容赦なく弾圧した。死者が九四〇人、逮捕者は六万人にのぼつた。日本政府は同じころ、ボースを支援することに決定して、ボースは日獨合意のもとに、海路で日本へ向かつた。

ボースはキール軍港を一九四二（昭和十八）年二月八日に、Uボートで出發し、マダガスカル沖で日本の潜水艦に移乗した。日本の占領地で軍用機に乗り換えて、五月十六日に東京に到着した。

ボースは嶋田海軍大臣、永野軍令部總長、重光外務大臣などと会つたうえで、東條首相と会談した。ボースは内外記者を集めて会見を行ない、インドへ向けてラジオ演説をした。そのうえで、日比谷公会堂の壇上から、二時間にわたつて演説した。

「約四〇年前に、私がようやく小学校に通い始めた頃に、アジア民族である日本が世界の巨大な白人帝国のロシアと戦い、大敗させた。このニュースがインド全土に伝わる代わりに市場から日本製の品物を買つてきて、『アジアの希望の光』のシンボルとして、家に飾つた。

そのあいだ、インドの革命家たちは、どうして日本が白人の超大国を打ち破ることができたのか、学ぶために、日本を訪れた。

印度のいたるところで、旅順攻撃や、奉天大会戦や、日本海海戦の勇壮な話によつて、沸き立つた。印度の子供たちは、東郷元帥や、乃木大将を慕つた。

親たちが競つて、元帥や、大將の写真を手に入れようとしても、それができず、その代わりに市場から日本製の品物を買つてきて、『アジアの希望の光』のシンボルとして、家に飾つた。

日本から、岡倉天心をはじめとする先覚者が印度を訪れ、アジアを救う精神を説いた。岡倉こそ、『アジアは一つ』と断言した、偉大な先覚者だつた。

このたび、日本は印度の仇敵であるイギリスに對して、宣戰した。日本はわれわれ印度人に対して、独立のための千載一遇の機會を与えてくれた。われわれはそれを自覺し、心から感謝している。

一度、この機會を逃せば、今後、一〇〇年以上にわたつて訪れる事はないだろう。勝利はわれわれのものであり、印度が念願の独立を果たすことを、確信している」

ビクトリア女王が「インド帝国」皇帝として即位してから、六六年目に当たる一九四三（昭和十八）年十月、ボースを首班とした自由インド仮政府が樹立された。

ボースはシンガポールにおける大会で、満場の拍手をもつて、仮政府首班に推挙された。ボースは所信表明で、「デリーへ（チャロ・デリー）！」という、祖国インドへ向けた歴史的な進撃の開始を、宣言した。

INA将兵は日本軍とともに、インド・ビルマ国境を越え、インパールを目指して、「チャロ、チャロ、デリー！（往け、往けデリーへ）」と雄叫びをあげ、そう大書された横断幕を掲げて、進軍した。「チャロ・デリー」は軍歌ともなつて、今日でも多くのインド国民によつて愛唱されている。ボースは将兵を「われらの国旗を、デリーのレッド・フォートに掲げよ」と、激励した。

自由インド仮政府は、日本とともに、イギリス、アメリカに對して、宣戦を布告した。この年十一月五日から六日間にわたつて、東京で大東亜会議が開催された。

東條首相、満州国の張景恵<sup>ちようけい</sup>國務總理、中国南京政權の汪兆銘<sup>おうちやまめい</sup>行政院長、フィリピンのラウエル大統領、ビルマのバー・モウ首相、タイのピブン首相代理であるワンワイヤヤコ

ン殿下らの首脳が、一堂に会した。ボースはインド代表として、参加した。

これは、人類の長い歴史において、有色人種によつて行なわれた、最初のサミットとなつた。人類に人種平等をもたらした、出発点となつた。まさに、日本史における輝かしい一瞬だつた。

今日、日本の多くの学者が、大東亜会議は日本軍部が「占領地の傀儡<sup>かいらい</sup>」を集めて、国内向けに宣伝のために行なつた会議だつたと、唱えている。しかし、このような日本人こそ、日本を精神的に支配しようとする、外国の傀儡といふべきである。

ボースは、大東亜共同宣言が満場一致で採択された後に演説し、この宣言がアジア諸民族のみならず、「全世界にわたる被抑圧民族の憲章となることを願う」と、訴えた。

ボースは一九四四（昭和十九）年十一月に、再度、来日したが、日本を取り巻く戦況は一変していた。この年三月から、日本軍がINAとともに、インド国内に攻め込んだインパール作戦が展開されたが、食糧弾薬の補給が続かず、六月には占領したコヒマを放棄して、総崩れになつて退却した。

七月にサイパン島が、アメリカに奪われた。日本は九月にペリリュー島から始まつて、グアム島、テニアン島といつた島々を失つていた。

そうしたなかで、ボースの講演会が、再度日比谷公会堂で行なわれた。

ボースは、雄弁だった。「アジアに住むインド人は、人的、物的資源を総動員して、日本なしに、アジアの解放はなかつた。一九四五（昭和二十）年に、日本は降伏したが、ボースは敗れなかつた。

I N A のインパール作戦からの残存兵力二六〇〇人と、マレー半島で訓練を受けていた新編師団が、バンコクに移動していた。

ボースはこれらの兵力を中国北部に移動させて、ソ連の支援を取りつけ、中央アジアからインドへ、デリーを目指して進撃する計画を立てた。

ボースはサイゴンを飛び立ち、八月十八日に台北に到着した。日本軍輸送機だいれんが大連へ向けて離陸した直後に、エンジン故障で墜落して、ボースは重傷を負つた。ラーマン副官に「私は生涯を祖国独立に捧げて、いま死ぬ。独立の戦いを続けるよう！」と遺言して、反英闘争に捧げた生涯を閉じた。

### インパール作戦は、けつして大死にではない

イギリスはI N A 将校たちを、イギリス国王に銃を向けた反逆罪によつて、裁いた。一万九〇〇〇人のI N A 残存兵力のうち、ヒンズー教徒、イスラム教徒、シーカ教徒の将校を一人ずつ選んで、軍事裁判の被告席に座らせた。ムガール帝国（一五二六～一八五七年）が築いた壮麗な城塞であるレッド・フォートが、法廷として使われた。

ヒンズー教、イスラム教、シーカ教は、インドの三大宗教である。被告席に座らせられた三人の将校は、インドそのものを裁く、象徴だった。

一九四五（昭和二十）年十一月五日に、裁判が始まつた。すると、インド全土にわたつて、不法な裁判を即時停止すること、被告たちを即時釈放すること、インド統治権をインドに返還すること、さらにイギリス人の引き揚げを要求する運動が、自然発生的に起つた。

裁判の弁護団打合せが行なわれ、証人としてデリーに護送されていた、沢田廉三・前駐ビルマ大使（日本が独立させたビルマに、派遣されていた）が、「みなさんはI N A が日本軍の手先で、インド将兵は自由意志によらず、日本軍によつて強制されたと主張して、罪を軽くる方向にもつてゆくのが、良策だと思う」と、提案した。

すると、インド側全員が憤つて、沢田に對して、「インド人を侮らないでほしい。IN Aは、日本軍と対等な立場で、共同作戦を行なった独立軍だった。日本軍の傀儡ではなかった。そのようなことを、絶対に言つてほしくない。その結果として被告全員が死刑となつても、インド国民に悔いはない」と、口々に言つた。

抗議行動がインド全土に、たちまち拡大した。ボースの出身地のカルカッタでは、一〇万人のデモが起つた。

レッド・フォートの周辺では、イギリス人指揮官が警官隊に発砲するよう命じて、数百人の死傷者が発生した。ついに、全国民がイギリスの支配に對して立ち上がり、反抗した。

イギリスはどうにも対応のしようがなくなり、一九四六（昭和二十二）年一月三日に、被告への刑の執行停止を発表せざるをえなかつた。

これを受けて、ニューデリーで「釈放祝賀大会」が催され、会場にチャンドラ・ボースの巨大な肖像画が飾られ、釈放された被告たちが万雷の拍手と、大歓声のなかで、凱旋将军のように迎えられた。

しかし、イギリスのインド軍総司令官だったオーキンレック大将が、「被告については

問責しないが、イギリス軍に対する拷問、殺人の非人道的犯罪について、法に基づいて裁く」と、発表した。

イギリスが数百年にわたつて、どれだけ多くのインド人を拷問虐殺して、非人道的に振舞つてきたことだろうか。

抗議デモが引き続き各地で頻発し、カルカッタでは警官が発砲して、一九人の死者がでた。

民衆につづいて、ついにインド将兵が愛国心に駆られて、立ちあがつた。軍港や、兵営で、イギリスの国旗を引きずり下ろし、イギリス軍と銃撃戦を交えるまでに発展した。

イギリスはそれにもかかわらず、二月七日にニューデリーにおいて盛大な「対日戦勝祝賀パレード」を挙行することを、計画した。

一万五〇〇〇人の将兵が、東南アジア連合国軍最高司令官のマウントバッテン元帥と、インド総督のウェーベル大将の観閲を受けることになつていた。

しかし、ニューデリーでは、全戸に弔旗が掲げられ、商店も、工場も、学校もすべて休みとなり、数万人の抗議デモが行なわれた。この時のニュース映画をみると、デモ隊のなかに、手製の日章旗を振っている者が、何人があつた。日本人は、大いに誇るべきであ

る。

当時の日本は、アメリカの占領下にあって、報道にも嚴重な検閲が行なわれていたから、日本国内でこのような現実は、いつさい報じられることはなかつた。

一九四七（昭和二十二）年八月十五日に、インドは二〇〇年にわたつたイギリスの植民地支配に終止符が打たれて、ついに独立を達成することができた。

独立後、レッド・フォートにおける報復裁判について、インド側のデサイ弁護団長は、「日本軍がインド国民軍を編成して、武器をとつて進軍させてくれた。この進軍が、インド全土で国民運動となつて、イギリスに独立を認めさせる契機となつた。インド独立をもたらしたのは、日本軍であつた」と、述べている。

今日の日本では、インパール作戦は無謀きわまりない愚行であつて、多くの日本将兵が「無駄死に」したと、みなされている。日本軍が敗走して、屍しかばねをさらした山中の道が、「白骨街道」と呼ばれて、非難されている。

しかし、歴史を鳥瞰すれば、日本軍が大きな犠牲を払つたインパール作戦には、輝かしい意義があつた。戦死した日本とINA将兵の亡靈が、デリーまで進軍したのだつた。日本は満身創痍となつて降伏したが、有色人種の解放という奇蹟を行なつた。

### 公開された日本本土侵攻作戦計画

二〇〇六年（平成十八）年に、ワシントンの国立公文書館で先の対日戦争末期に、アメリカが作成した日本本土侵攻作戦計画文書が、すべて機密解除された。

文書には一ページごとに、「トッブ・シーケット厳秘」のスタンプが押されており、九州上陸作戦と、本州の関東上陸作戦の一部に分かれている。

九州侵攻作戦は「オーリンピック作戦」と名づけられ、トルーマン大統領によつて承認され、七月二十四日に太平洋にあつたマツカーサー元帥、チエスター・ニミッツ元帥、ヘンリー・アーノルド大将の陸海空司令官に対し、作戦を実施するように極秘命令が下された。

この計画によれば、一九四五（昭和二十）年十一月一日早朝に、陸軍、海兵隊の十四個師団が、レイモンド・スブルアンス第五艦隊司令官指揮下の六六隻の空母を含む三〇〇〇隻に分乗、掩護されて、宮崎市附近、有明湾、鹿児島市の海岸に殺到することとなつた。

十一月四日には、開聞岳附近に上陸する。その前の十月二十七日には、九州周辺の小島群を占領して、水上機、レーダー基地などを設置する。かいもんだけ

宮崎周辺の海岸の上陸予定地点は、アメリカ将兵の士気を鼓舞するために、それぞれ、ビュイック、キャデラック、シボレー、クライスラー、フォード、オースチンと、アメリカ国民が誇りとする乗用車の名がつけられていた。

侵攻軍には、イギリス東洋艦隊が何隻か参加する予定だつたため、イギリスに対するジエスチュアとして、イギリス製乗用車のオースチンの名が加えられた。

解禁された文書によれば、九州侵攻作戦だけでも、アメリカ軍に二五万人にのぼる死者がでると推定されていた。

関東平野への侵攻は、「コロネット作戦」の暗号名が与えられ、一九四六（昭和二十二）年三月一日に相模湾に、二八個師団が上陸することになった。九州侵攻作戦の一倍の兵力である。

関東平野への上陸作戦には、第五艦隊の三〇〇〇隻以上の艦艇が、投入されることになつてゐた。

日本軍民による頑強な抵抗が予想されたので、アメリカ軍の戦死者も膨大な数にのぼることが、予想された。

マッカーサー元帥の情報担当部長だったチャールズ・ウイロビー少将が、日本が一九四

六（昭和二十二）年の末まで抗戦を続けた場合、アメリカ軍の戦死者が「少なくとも、一〇〇万人」に達するとの見積りが、記載されている。

### アメリカ政府が弄した奸計

ワシントンが日本本土を侵攻するのに当たつて、恐れていたことがあつた。

機密解除された文書は、こう述べている。それまでアメリカ軍は、太平洋の島々を、硫黄島まで、「蛙飛び作戦」によつて奪取してきたが、どの場合にも、日本の守備隊に対して、二・五倍以上の兵力を投入した。

ところが、日本本土に上陸することになると、アメリカ侵攻軍に対して、迎撃つ日本軍は二倍以上、あるいは民間人まで加われば、それ以上になる。日本人ほど悪魔に憑依されたように狂信的に戦う民族はないとされていたから、アメリカが持てる力をすべて投入しても、日本を屈伏させるには、一九四七（昭和二十二）年までかかるとみられた。

この機密文書によれば、日本は海に空に陸に、軍民が休みなく特攻攻撃を行ない、アメリカ軍に出血を強いることになる。事実、アメリカの占領後に行なつた調査では、敗戦時に日本は、五六五一機の陸軍機と、二〇七四機の海軍機を含め、合計一万二七二五機の

爆撃機、戦闘機、偵察機を、堅固な掩体のなかに温存していた。

そのために、日本が降伏するのに当たり、連合国側が無条件降伏を要求したとしたら、原子爆弾を投下したとしても、日本国民が抗戦をやめることがないと、思われた。

そこで、アメリカ政府は國務次官だったジョセフ・グルー前駐日大使の献策もあつて、奸計を弄した。

日本に和平を強いるために、天皇制を温存することを餌にして、「コンディショナル・サレンダー」を申し出ることにした。

一九四五（昭和二十）年七月二十六日に、トルーマン大統領がベルリン郊外のポツダムにおいて音頭をとつて、アメリカ、イギリスの首脳会談を催し、日本に条件付き降伏を求めるポツダム宣言を発した。蔣介石政権は招かれなかつたが、事後に参加した。

その時アメリカは、日本の手強さに手を焼き、ソ連に参戦するよう誘つた。その結果、ソ連もポツダム宣言に加わり、八月八日には日ソ中立条約を蹂躪して、日本に襲いかかつた。

ポツダム宣言は、日本軍に対するのみ無条件降伏を要求し、日本政府に対する条件降伏を迫つた。その証拠に「われらの条件は以下のとおりである（傍点は筆者による）」と、

条件を羅列していた。ところがアメリカは、いつたん日本を占領し、日本軍の武装解除を行なうと、まるで手品のように、日本が無条件降伏をしたことに、擦り替えた。

天皇を人質にとつて、アメリカの言いなりにならなければ、天皇を東京裁判の被告人に仕立て、生命も保障しないと脅したから、日本は従わざるをえなかつた。

アメリカによる対日占領は、三年余の対日戦争よりもはるかに長く、六年以上にわたつた。アメリカはまず日本を物理的に打ち破り、そのうえで日本人の精神を打ち碎くことに努めたから、十分な時間を必要としたのだった。

### 「パンドラの箱」とは何か

ペリーは一八五三（嘉永六）年に、黒船艦隊を率いて日本へやつて来た時に、うつかり知らずに、「パンドラの箱」を開けてしまつた。

読者も「パンドラの箱」といえば、おわかりになることだろう。  
パンドラは、古代ギリシア神話の女神である。最高神のゼウスが、けつして開けないことを条件にして、パンドラに美しい箱を与えた。これは、日本の浦島太郎伝説に似ている。人類の発想は似ているのだろう。だが、強面な民族と、心根がやさしい民族がいるか

ら、発想も自ずと違つてくる。

パンドラは女だから、好奇心を抑えられずに、箱を開けてしまった。その箱には、あらゆる悪が封じ込まれていた。

そのために、箱のなかにあつたすべての悪が、世界に噴きだしてしまった。

ペリーが起こしたこと、同じことだつた。あの傲慢なペリーが、まったく予期しなかつたことだつた。

ペリーの襲来を境として、江戸が短期間のうちに、一変してしまつた。平和で、繁榮していた江戸時代の日本文化と、人々の生活が無惨に破壊された。

ペリーは滑稽なほど思い上がつて、自分が江戸時代の美しい日本を破壊した意味が、まったくわからなかつた。白人優位の歴史観しか、持ち合わせていなかつた。パンドラの箱を開けた結果として、どうなるのかということを、理解できるはずがなかつた。

日本人は西洋の毒牙から生き残るために、西洋を必死になつて模倣した。日本人はもともと才能ある民族だつたから、工業化に見事に成功した。日本は大国を目指して力をつけてゆき、一八九〇年代に日清戦争に勝利した。

その一〇年後には、日露戦争に勝ち、ついにはパールハーバーを襲つて、日米両国間の

### 戦端を開いた。

アメリカのペリー的なるものが、三年八ヶ月以上にわたつた日米戦争を、もたらした。

江戸市民の末裔が、大量に虐殺された。

だが、パンドラの箱から、あらゆる悪が出尽くした後に、残されていたのが、希望だつた。

人類がこの地上に植民地が存在せず、人種平等の理想の世界を迎えることができたのは、日本が大東亜戦争に立ちあがつた成果だつた。

ペリーは、日本が立ちあがることになつた発端を、つくつたのだ。

歴史に「イフ（もし）」を唱えてはならないのかもしれないが、もし、ペリーが黒船艦隊を引き連れて浦賀沖にまで侵入し、日本人の誇りを深く傷つけることがなかつたとしたら、世界史は変わつていただろう。

日本が、貪欲な西洋による帝国主義の脅威を恐れて、あのような形で富国強兵政策を取り、軍国主義を国是として、世界の強国の一となることはなかつただろう。

日本はペリーの黒船が江戸湾に不吉な姿を現わしてから、八八年後の一九四一（昭和十六）年十二月八日まで追い詰められ、国土がすべて灰燼に帰した。

しかし、その結果として、有色人種がはじめて大いなる希望の燭光<sup>しょっこう</sup>によつて照らされ、人種平等の理想が実現した。

アジア・アフリカに、数多くの独立国が生まれた。もちろん、これはキリスト教の神の御旨<sup>みむね</sup>に背くものだつた。

日本は二十世紀の人種平等の神話をつくることによつて、日本太古の国造りの神話を、二十世紀になつて再演してみせた。新しい世界を生むことになつた神話を、人類のためにつくりだした。

日本こそ、人類の希望だつた。

ペリーは「パンドラの箱」を、開けたのだつた。